

人物で語る 日本デンマーク

⑰ 岩槻信治Ⅲ

岩槻信治は、稲の品種改良で多くの業績をあげると共に文化面においても偉才を發揮した。芸能における岩槻は、「三江」と号し、民謡の作詞・作曲とともに踊りや振り付けも行った。そのほか、謡曲や書にも特技を持っていた。また、多くの農業実践の書を著した文筆家でもあった。

岩槻三江の民謡は、農業関係の歌が多く、内容は農村的であり、郷土に關したものが多いのが特色である。ここで紹介したい。

河野の茄子の品種改良に岩槻が貢献していたことはよく知られている。この河野の茄子の宣伝歌「河野よいとこ一度はおいで」（昭和四年三月）で始まる「河野小唄」の作詞・作曲は岩槻であり、踊りの指導者でもあった。また、碧海郡の発展の歩みを歌った「碧海音頭」も岩槻の自慢の作である。この音頭は、「サア矢作川から…」より始まり、碧海郡の発展の過程に、明治用水の恩恵による春夏秋冬の郷土色豊かな風景が紹介されている。続いて「碧

海よいとこ日に日に太る太る姿をみやしゃんせ」とまとめられ、詩は郷土の発展史ともなっている。

安城公園の「文学の散歩道」を歩くと「たごさく音頭」（昭和一〇年二月）の詩碑「鳥が歌へば…」を見ることが出来る。この歌は、安楽荘料理店の落成開店披露としてつくられた岩槻による音頭である。

また、「安城野原節」（昭和三年）では、三番に「稲は万歳中好千本キタコラサツサ愛知旭にノハラ器量よし」とあり、岩槻技師が育成した稲の優良種が紹介されている。これらの音頭や民謡は、各地の歴史や文化をつづつたものが多く、日本デンマークの特色を紹介するにふさわしいものである。

一方、岩槻は多くの著書を持ち、主な書は、『稲作實際論』（初版昭和三年二月二五日）、『農民叢書・米麥篇』（初版昭和七年三月）、『農家必携・農藝寶典』（昭和七年一〇月）、



「たごさく音頭」の詩碑
（安城公園 昭和47年建碑）



『三江・文化する郷土』（岩槻の芸能文化の業績をまとめた書 吉地昌一編）

『稲作改良精説』（初版昭和一〇年二月一日）、同書（新訂版昭和一五年一月二五日）のほか、遺著集『米麥技術の研究』もある。

また、岩槻は、農家に新しい農業技術を紹介した月刊雑誌「安城農報」（昭和一二年から「農藝」と改題）の編集者であり、寄稿もしていた。その内容は、米の増収に関する論文や生活向上に關連した隨筆が見られ、農村文化の香りのある雑誌となっている。

ほかに小冊子『おもかげ—岩槻信治小伝』がある。この書は、岩槻が死の直前に子息に對して自分の生涯と業績について口述した内容をまとめた貴重な記録である。

岩槻信治は、長年の疲労が重なり一九四八年（昭和二三年）五月九日に病没した。享年五八歳であった。岩槻の師、山崎延吉は、「もう十年存命を願うは、万人共通の念願であるう」（『岩槻君を偲ぶ』）と語った。

今、安城農業技術センターには、岩槻信治の業績を物語る稲の標本・著書・遺墨・諸記録などを展示した「岩槻記念館」がある。

文 尾関文啓